

松江城下絵図とデジタルマップ ―その構築・分析・活用まで―

山形大学 渡辺理絵

本発表の目的：市史編纂事業における松江の城郭図研究と城下絵図研究の研究成果について

本講座は本日が平成 30 年度の最終講座となる。そこで発表者が関わったこれまでの松江市史編纂過程
の中での城郭図研究と城下絵図研究の研究成果をみていきたい。

第 1 部 城郭図研究

1) 松江の城郭図の研究―松江城関係図の所在調査に関する 3 つの画期

①建築史学研究者による調査―嚆矢―

島田成矩氏は昭和 45 年に現存する城郭図や御殿平面図などを取りまとめ、21 点（城下絵図や文書、明治以降の資料を含む）を一覧表にする（島田 1970）。昭和 50 年には、その後の調査結果として、新たな資料を加えた 39 点について寸法・形態や所蔵先を確認し一覧表を更新した（島田 1975）。

それ以降、個々の城郭図や城郭建設に深く関与する史料の調査・研究が和田嘉宥氏によって進められ、研究の深化をみせた（和田 2001;2013;2014）。

②石垣修理事業に関する調査

平成に入ってから松江城整備の中で進んだ石垣修理の事業に付随し城郭図調査が進められた。松江城は本丸、二之丸を中心に観光や市民の憩いの場としての利用が進んだことをうけ、史跡松江城の整備と活用のため、平成 7 年度から石垣の保存修理や三之丸地区、二之丸下ノ段地区における櫓の復元や遺構の平面整備が実施された。それに先行して遺構の基礎資料収集のため、松江城に関わる文献・絵図・写真資料の調査が行われた。その成果は、『石垣調査報告書-史跡松江城-』（文化財保存計画協会編 1996）や『史跡松江城整備事業報告書-第 2 分冊調査編-』（島根県松江市教育委員会 2001）にまとめられている。前者では、「史跡松江城関係古絵図一覧表」として文献・絵図・写真を含めて 61 点を、また後者では 55 点の絵図を確認している。いずれも重要絵図については解説が加えられている。

③松江市史編纂事業に関する調査―悉皆―

『松江市史 別編 松江城』の製作にともない、市史編纂委員および市史編纂課では改めて松江城関係図の悉皆調査を行った。その結果、島根県はもとより東京都、兵庫県、石川県など遠方に所在が確認でき、新出のものを含めて 150 点を超える絵図が確認された。先述の先行研究から大幅に点数が増加している背景には、市史編集委員による絵図の悉皆調査が全国的かつ網羅的に進められたという事情がある。先行研究では、研究者の関心や目的が高精度な絵図に集中していたため、たとえば極端にデフォルメされた松江城図などは対象外とされている。当該調査は、この種の絵図もふくめた総合調査としての特徴を有する。

2) 城郭図分類の試行

城郭を描いた絵図は、松江に限らず、金沢、姫路、館林、鳥取、西尾、仙台など全国各地に残されてい

る。いずれの絵図も多岐にわたり、概要を把握することは容易ではない。ここでは松代城の関係図に関する分類を参考にし（長野市編 2006）、松江城関係図の現存状況に則して大きく分類した。

ア 城の縄張を描いた絵図

イ いわゆる「城絵図」のスタイルをとる絵図（城下絵図に松江城が描かれている絵図）

ウ 幕府へ提出の城修理許可申請文書に添付する絵図

エ 御殿の間取をあらわした絵図（指図）

オ 城郭の営繕用の絵図（建地割図）

カ 絵画資料としての絵図

キ 主に兵学に供せられた絵図

3) 松江城郭図研究からわかった新知見

上記「ウ：幕府へ提出の城修理許可申請文書に添付する絵図」について

この種の絵図は、現存する松江城関係図のなかで、その描写内容に信頼性を有したため、これまで高い関心を集めてきた絵図群である。江戸時代、城郭修理には幕府の許可が必要とされ、城郭の普請許可申請にあたって絵図が添付された。このため全国的に城郭普請にともなって城郭図が作成され、藩側にはその控えが残された。松江に残るこの種の絵図は、延宝 2(1674)年のものが最古であり、次いで元文 3(1738)年、安永 2(1773)年、安永 7(1778)年、天保 11(1840)年（原本不明、その写しが現存）、元治元(1865)年と全 5 葉である。いずれも本丸・二之丸・三之丸を描き、破損の箇所を朱線をひき、その下部に破損の状態を記している。絵図隅には、藩がこのような箇所に破損が認められ、修復したいため、幕府の許可を求める旨が記された。

着眼点 1：修補許可の文言の変化

着眼点 2：延宝 2 年の城郭図と正保城絵図との近似性

（補足「正保城絵図」の評価の刷新（和田・稲田 2017））

第 2 部 城下絵図研究

1) 正保城絵図以前の城下絵図

正保期に各藩が幕府に提出したいわゆる「正保城絵図」は、幕府の文庫である紅葉山文庫を引き継いだ国立公文書館内閣文庫に 63 点が確認され、その中に「松江城正保年間絵図」も含まれている。城下町を起源とする都市では、この正保城絵図がもっとも古い城下絵図であるところが少なくない。正保城絵図以前の城下絵図が残っているところはごくわずかである。このような中、松江の場合は、堀尾図（「堀尾期松江城下町絵図」）や京極図（「寛永年間松江城家敷町之図」）と複数の初期城下絵図が残っている。

発見！宮城県図書館蔵・涌谷亘理家蔵『雲州松江之図』（M291－ウ 4）

2) 城下絵図のデジタルマップ化への挑戦

①近年の研究環境

歴史資料のデジタル化の動きが盛んになってから久しい。文書史料をスキャンしてデジタル化し公開するサービスは多くの所蔵機関でみられ、利用者の利便性を高めている。また、極めて大きな近世絵図についてもデジタル化の動きが顕著である。国絵図のような大型の絵図については当初、デジタル化の動

きは鈍かったように思えるが、国立公文書館をはじめ、石川県立図書館、徳島大学附属図書館、岡山大学附属図書館などに代表される所蔵機関では、円滑な画像の閲覧が可能となっている。

デジタル化は利用者の利便性を高めるという利点のほかに、史料の保護にも一役買っている。古文書などの史料は閲覧を重ねるたびに、折り目などに傷みの生じる恐れがあるが、デジタル化は史料にかかる負担を減らす。また所蔵機関の職員の業務負担を軽減させる効果をも持つ。史料の搬出入は労力を要する業務の 1 つであるし、大型史料の閲覧については、スペース確保の課題も生じてくる。デジタル化はこうした課題の解決に有効なツールとなっている。

ところで、史料のデジタル化には 2 つの主体が関与する。1 つはそれを利用する側、他方はそれを構築する側である。私は松江や米沢の城下絵図では後者の側に位置していた。松江の城下絵図のデジタル化では GIS（地理情報システム）を用いた。これは、位置という絶対的な指標を接着剤として、近世と現代をつなぐことができる。また米沢の城下絵図のデジタル化ではインターネット上で人名の検索、土地利用の検索などを可能とした。研究のみならず教育や観光といった方面での利活用を期待している。

②研究成果の発表—2016 年歴史地理学会—

「近世中・後期における松江城下町の空間的変容—2 時点の GIS 城下町マップの作成を通して—
渡辺理絵（山形大学）・大矢幸雄（前松江市立中央図書館長）」

本発表は、2 時点の GIS 城下町マップの作成を通して、18C 中頃から 19C 中頃における松江城下内部の空間的変容について報告することを目的としている。

GIS 城下町マップは、属人データと属地データからなる。属人データはまず、城下絵図の屋敷ごとに番号を付し、氏名を入力する。並行して藩士の家禄や格式を列記した給帳のデータベースを作成する。最後にこれらを氏名に基づいて結合させる。つづいて属地データは、城下絵図の屋敷について一区画ごとにポリゴンを作成した。このポリゴンに「武家屋敷明細帳」に記載の屋敷面積を付与した。最後に屋敷番号にもとづいて、属人データと属地データを結合させた。この作業を、延享年間(1744～1748)「松江城下絵図」（島根県立図書館所蔵）および嘉永 6 年頃（1853）の「松江城下絵図」（個人蔵）に適応した。

GIS 城下町マップの分析から 2 時点の変容として、公的施設の増加と屋敷数の増加が注目された。とくに後者についてみれば、1750 年頃は大橋川以北で、家老～医師までの 8 格式に属する家臣と藩施設の数について 1750 年頃は 529 軒であるのに、1850 年頃は 658 軒と約 24%増加している。同様の傾向は足軽地区でも見られた。この点に関係して、江戸初期～幕末までの藩士数の推移をみると、1770 年以降、藩士数が増加していることが見いだせた。屋敷数が増加する背景には、①明地の活用、②屋敷の新設、③屋敷の細分化があり、とくに③は②の 2 倍近い地所で起きていた。③が可能であった背景として、松江における武家地（足軽地区を除く）の屋敷規模は、平均 429 坪（1750 年頃）であり、他藩と比較して広いことを指摘できる。屋敷規模の大きい米沢や仙台、郡山ではその理由を自給の道を与えるため、あるいは少ない家禄を補わせるためという研究がある。松江の中級家臣の屋敷内の土地利用をみれば、家屋を中心に畑が広がっていることから、先行研究での指摘は一応に当てはまるが、これと合わせて 17 世紀初頭の屋敷建設時についても加味する必要がある。遺跡発掘報告書から、23 地点の堀尾期（17 世紀初頭）の遺構面の標高を抽出し、GIS 上で等高線を示した。その結果、松江の武家地 1 区画では城郭近くで 1.1m、東側では 0.1m と概して低い。低湿地に開発された松江では、屋敷地造成の際、島状整地という手法が採られた例が報告されている。それは屋敷内の家屋部分の下層を島状に盛土していく手法である。盛り土

は家屋の周囲から採土したと考えられ、家屋周辺は溝が張り巡らされている。低湿地での屋敷地造成においてこのような手法を採用することが多かったならば屋敷規模が広大な点とも整合しよう。以上のような要因から、松江藩では増加した藩士の住まいを、武家地の新設ではなく、既存武家地への収容に求めているといえよう。

【参考・引用文献】

- 大矢幸雄・渡辺理絵（2014）3月「白潟町家の商人と町人地の変容―「松江白潟町絵図」の分析を中心として―」松江市史研究第5号（松江市歴史叢書7）、pp17-32
- 大矢幸雄・渡辺理絵（2015）3月「19世紀における松江・北堀町新橋の住人と空間構成―「北堀町新橋町絵図」の分析を通して―」松江市史研究第6号（松江市歴史叢書8）、pp1-12
- 島田成矩（1970）「松江城の城郭復元と史料―松江城の城郭図をめぐる―」島根県教育委員会『島根県文化財調査報告』島根県教育委員会、1-67.
- 島田成矩（1975）「松江城の城郭図について」島根県教育委員会『島根県文化財調査報告 第十集』島根県教育委員会、3-12
- 長野市編『松代城絵図集成』長野市、2006.
- 和田 嘉宥（2001）「竹内有兵衛と『竹内右兵衛書留』について：松江藩御大工の研究・その7」学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠 389-390
- 和田 嘉宥（2013）「史料翻刻・考察『御城内惣間数』」松江城研究 2、9-26
- 和田 嘉宥（2014）「三ノ丸の特色とその推移について」松江市歴史叢書 7、71-86
- 和田嘉宥・稲田信（2017）「「正保城絵図」と「出雲国松江城絵図」に関する考察」松江市史研究第8号（松江市歴史叢書 10）、19-32
- 渡辺理絵・大矢幸雄（2017）「18-19世紀の松江城下における武家屋敷の流動性とその背景：歴史GISと屋敷管理史料からの分析を通して」歴史地理学 59-2、1-26
- 渡辺理絵・大矢幸雄（2013）3月「「松江城及城下古図」の特徴とその表現内容」松江市歴史叢書6号 松江市史研究 4号、pp29-38.